広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

津軽の鍛冶職人がつくる、涼しい音色と紋様

吉澤 剛　青森／鍛冶職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川 一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。

昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやwebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

2年目となった今年は、全国47都道府県から計51名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ね、途中経過のプロダクトをうけて行うエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの試作に取り組んだ。1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー！メディア・デザイン関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロダクトをプレゼンテーション。

1月17日、プレゼンテーションにて

下川氏とプロダクトの打ち合わせ

吉澤さん愛用の工具

世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。また、商談会の終盤ではビームスジャパンとのコラボレーション企画「LIFE with NEW TAKUMI～新しい匠、新しい暮らし～」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。青森県選出の匠・吉澤剛さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め！電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

模様が美しい ハンドベル

弘前市の鍛冶職人・吉澤剛さんが、1月17日に東京で開かれた「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」のプレゼンテーションで発表したハンドベル「雪の音（ゆきのね）」。今回は、音色と大きさが違う3種類が出品された。このハンドベル、金属面に美しい模様が浮かんでいるのが特徴だ。

この技術の基になっているのが、吉澤さんが所属する弘前市の「二唐刃物鍛造所」独自の技術「暗紋」。暗紋は、同鍛造所独自の技法で2007年に製品化された。鉄と鋼を何層にも重ねて磨き上げることで、独特な模様が浮かび上がる。この工程は青森を代表する伝統工芸「津軽塗」に通じるところがあると言える。

吉澤さんの作業風景

何度も試行錯誤 あきらめず前へ

ハンドベル「雪の音」のベルの部分は、鉄鋼の代わりにニッケルとステンレスを重ね、薬品で加工している。そうすることにより、表面に美しい模様が浮かび上がる。取っ手部分は木製。

プレゼンテーションの中で吉澤さんは「家庭内で、コミュニケーションのきっかけになり、お互いに笑顔になれるような使い方を想定しました」と製作を始めた動機を語っていた。

昨年秋から本格的にハンドベルの製作にとりかかった吉澤さんだが、さすがにこれまで作ったことのない未知の分野だったため、最初から試行錯誤の連続だったようだ。

「まったくゼロからのスタートだったので、試作第1号なんかは全然音が出ませんでした。その後もなかなか思ったような音が出せなくて…。結局試作品は10個ぐらい作りました」と吉澤さんは当時の状況を振り返っていた。ベル部分の金属の厚さを変えたり、取っ手の接着方法も色々試してみた。

そのかいあってか、今回出品した3つのハンドベルは鳴らすと「リーン」と非常に涼しい音色をかなでてくれる。それでも吉澤さんは、まだ音色・質感に満足していないようだ。

「今回、成果として作り上げた試作品ですが、まだまだ改良したい部分があります。今後も時間を見つけてさらにブラッシュアップしていき、自分の理想とする音色に近づけていきたいと思います。また、今回はハンドベルのほかに風鈴やソムリエナイフも試作してみました。こちらはまだ完成とは言えない試作途中品。そのため、今後も時間を見つけ改良を加えていきたい」。いろいろな方面にチャレンジし続ける吉澤さん。今後の活躍に期待したい。

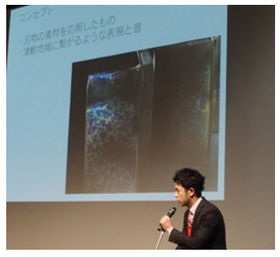
完成プロダクト・ハンドベル「雪の音（ゆきのね）」

未知の世界への挑戦

吉澤剛さんが勤める弘前市の二唐刃物鍛造所は、約350年の伝統を誇る日本有数の刀鍛冶の名門。吉澤さんはその刀鍛冶の家系を受け継ぐ8代目。2011年に25歳で入社以来、主に包丁やナイフを作ってきた。

「津軽打刃物」という伝統的な刃物を作り続けてきた吉澤さんだが、2007年、金属面に独特な模様「暗紋」を浮き上がらせる技法を確立するなどを模索してきた。

「今回、匠候補のオファーをいただいた時、刃物以外の新しいものにチャレンジできるいい機会だと思いました」と語る吉澤さん。最初に挑戦してみようと思ったのは暗紋が浮かんだ金属で作る酒器。

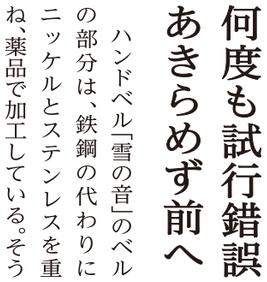

プロダクトの説明をする吉澤さん

ところが、試作品を作り始めて吉澤さんはすぐに壁にぶち当たる。鋳型から作るのとは違い、この酒器は金属板を曲げて加工する。ところが曲げの工程でひびが入ってしまい、なかなかうまく加工できなかった。

8月に下川氏が来青した時、まだ試作品は完成していなかった。下川氏からは「酒器だけじゃなく、もっと違う可能性もあるのではないか」と別のアイテム作成も提案された。その中には吉澤さんがこれまで思いもよらなかった「気づき」もあったようだ。

吉澤さんが新たに製作を始めたのが、今回プレゼンテーションで発表したハンドベル「雪の音（ゆきのね）」。「リーン」と涼しげな音色が鳴り響く。訪れたバイヤーたちにも好評で、みなその音色に興味津々。

「今回、このプロジェクトに参加できて一番よかったのがほかの匠の人たちとのつながりができたこと。これを機に、他分野の匠とコラボして違った分野の製品を企画してみたい」。吉澤さんの挑戦はまだ始まったばかりだ。


バイヤーと商談する吉澤さん

振ると涼しい音が鳴ります

吉 澤　剛
青森／鍛冶職人

1986年青森県弘前市生まれ。350年代々続く刀鍛冶の家系の8代目。2011年後継者として長年培われてきた技術と歴史を守るため入社。家庭用から和食のプロ向けの包丁製造に携わっている。2015年青森県教育委員会より、青森県古式銃砲刀剣類の登録審査委員に任命される。フランス国際見本市メゾンエオブジェ、他海外展示会に出展。OMOTENASHIセレクション2014受賞。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT